

スコット・サイモンさんについて

京都市山科区 須川恒

スコット・サイモン (Scott Simon) さんはオタワ大学の文化人類学の教授で、2017年10月から2018年7月まで大阪府吹田市国立民族学博物館客員研究員として滞在し、日本の自然認識、特に人々と野鳥の多様な関係を調査した。

サイモンさんにはじめて出会ったのは2018年2月11日に国立民族学博物館で映画「鳥の道を越えて」の鑑賞会や渡り鳥についての講演会があった時だった。英・仏・独・中・日語で話せる研究者とのこと！

その後2018年3月31日に日本野鳥の会大阪支部主催の「探鳥会を10倍楽しむために」の集まりの中でサイモンさんの講演があると久下直哉さんから誘いがあったので聞きにいった。

講演でまずサイモンさんは「人は鳥を～する」という事例をたくさんあげた。人は鳥を見る(楽しむ)、人は鳥を捕まえる(飼ったり食べたり)、人は鳥を描き、尊敬し、弔うなど、多様な人と鳥との関係があることを指摘した。

それらの関係は民族や地域を越えて共通する部分もあるが、異なっている部分もある。そういった関係を現在研究しているという講演だった。

もちろんバンダーは鳥に足環をつける。久下さんはすでに淀川のヨシ原における標識調査にサイモンさんを案内していた。さらに、冠島のオオミズナギドリ (*Calonectris leucomelas*) の標識調査に参加したいとの連絡をサイモンさんからもらった。冠島調査研究会のサイトには2017年8月の調査に参加したドイツ人レ

ナ・ヴィーストさんの英文による参加レポートが掲載されている(アルラ 2016 年秋号にも掲載)。サイモンさんにこのレポートを紹介したら、サイモンさんは既にこのレポートを読んで参加したいと思ったとのこと。

調査が終わってから、オタワ大学のブログに記事を書くので、やりとりをした際に、サイモンさんの英文を和訳してあったので、それを元に紹介する。

なおサイモンさんは、伊丹市昆陽池のカワウ (*Phalacrocorax carbo*) の標識調査にも参加してやはり大学のブログに日本におけるウ類(カワウや鶺鴒)を巡る話題を紹介している。また、カナダに帰国後 2018 年 8 月にバンクーバーで国際鳥類学会議があり、初日に開催された世界の鳥類標識調査関係者の会議に日本からの参加者(尾崎清明さん、細谷淳さん)とともに参加した。オタワにおいてバンディングの活動に参加しているとの連絡ももらっている。

太平洋のセンチネル(見張り人)：海鳥は我々に オイルインダストリについて何を語るか？

スコット・サイモン(オタワ大学文化人類学教授)

鳥類学者の須川恒さんが、今年5月、京都府舞鶴市が管轄している無人島の冠島で行われているオオミズナギドリ (*Calonectris leucomelas*) の調査チームに招待していただき、私は熱意をもって参加しました。海上自衛隊の支援を受けて舞鶴市(文化振興課)が主催したこのモニタリングプロジェクトは、1971年以來継続的に行われています。鳥類の存在と敏感な生態のために、島は1924年に国の天然記念物として指定されました。科学的、宗教的目的(島には三つの小さな神社があります)を除き上陸は禁止されています。西太平洋での人間と鳥の関係に関する私の研究の一環として、ミズナギドリ類と鳥類学者についてもっと学びたいと思っていました。私はこの4日間の調査で出会ったこの鳥が、私にグローバル経済の性質についての教訓を提示するとは思っていませんでした。

IUCNによると、オオミズナギドリの総個体数は約300万羽で、減少していると考えられています。毎年夏、彼らは日本とロシアの海岸と沖合の島々で繁殖します。中国、北朝鮮、韓国の島々にも広がっています。冬の間、彼らはオーストラリア北部やニューギニアなどの南の海域に移動します。IUCNレッドデータブックには、主に導入されたネズミ類および野生のネコの脅威のために、一部は漁業混獲のために、オオミズナギドリは脅威に近いと区分されています。福島原発事故による放射能も御蔵島の鳥類に負の影響を及ぼす可能性があるかもしれません。

優れた写真や研究データを、プロジェクトのウェブサイト(日本

語)で見ることができます。

私は夕方の光景に驚きました。何千羽もの群れが、ダイナミックソアリングと呼ばれる飛翔をしています。鳥は、波の近くのより遅い風に乗って飛行し、高度を取得し、より強烈な風を捉え、海に降りる。この飛行に由来するのは、「水をなぐ鳥」という意味の、鳥類のオオミズナギドリの日本語の名前です。日没直後には、数千羽以上もの劇的な "鳥の柱" を形成し、島の巣穴に襲いかかります。騒々しい夜を過ごして、騒々しい仲間と鳴き声を交わしたり、交尾したり、巣穴を開けたりします。夜明け前に崖や木々から飛び出す前に約 3 時間だけ眠ります。彼らは「足洗い」と呼ばれる群れ行動で海上に集まり、魚やイカのために餌を食べるために飛び立つ前に "足洗い" をします。

漁師は大きな魚が集まる場所をオオミズナギドリの群れが示すので、彼らに感謝します。須川さんの研究によると、鳥は繁殖地への忠実度が驚異的で、毎年春にカナダ人がフロリダから戻ってくるのとほぼ同じ精度でコロニー内の同じ場所に戻ってきます。

夕方には、神社の近くにある調査地で巣穴の中や地表にいる鳥を捕まえました。鳥がすでに脚に連続番号が刻印された金属リングを持っている場合、その番号は忠実に記録されます。リングのない鳥を捕まえた場合は、プライヤーを使用してリングを取り付け、番号を記入します。一部の鳥は大きさと体重を測定します。この研究は、須川さんと彼の仲間がコロニーの個体群と健康を監視することを可能にします。最も古い記録されたオオミズナギドリは少なくとも 36 歳です。これは、バンディングした瞬間には彼らの年齢が何歳かを知ることができないためです。リングによって標識後の年数が判ります。本当に丈夫な長寿の鳥です。

二日目の朝、日が上がり、最後の鳥たちが森から出てきたとき、須川さんは突然一羽の鳥を注意深く見ました。その胸とその頭の上には、ざらついた黒い物質がついていました。彼は慎重にサンプルを採取し、化学分析を行うことができる化学の教師に渡しました。彼は、今年の1月14日に貨物船に衝突して火災後、中国の海に沈んだイランの **Sanchi** 油タンカーによる汚染に遭遇した可能性を指摘しました。

CBCは1月の油流出は「パリ市域の規模」であると報告しましたが、**Exxon Valdez** や **Deepwater Horizon** 災害で流出したものは異なる種類の石油製品であるため、その影響についてはほとんど知られていません。天然ガス生産の毒性液体副生成物である凝縮液は、動物を泥だらけにする黒い小球に詰まることはありません。それでも、専門家は、有毒な凝縮液が人間の摂取を目的とした魚を汚染する可能性があることを懸念しており、鳥類も危険にさらされていることを示唆しています。英国海洋センターの科学者たちは、流出が本州の南岸、日本海にも及ぶ可能性があるかと予測しました。確かに、我々はこの流出によって汚染されているかもしれない鳥を、304羽の鳥の中から1羽だけ見つけました。凝縮液が蒸発して溶解して、鳥に与えられるダメージが制限されるかもしれませんが、それにもかかわらず、韓国からの研究によると、オオミズナギドリは、小規模の油の流出や「慢性油汚染」によって既に脅かされていることが示唆されています。その1羽の鳥は、すでに存在していた問題に私の関心を開いてくれました。須川さんは海鳥の重油問題に関心を持つグループにこの発見を報告しました。

人類学者フレデリック・ケック (**Frédéric Keck**) は、台湾と香港のアマチュアの野鳥観察者鳥を「環境変化のセンチネル(見張り

人)」と見なしました。数十年にわたる長期的なモニタリングプロジェクトを行っている専門の鳥類学者は、石油が鳥に与える影響に注目すると、国際的なさまざまな合意を包括的に、また相互に関連して考える必要があることが示唆されます。例えば、カナダからの石油の輸送は、生物多様性条約、渡り鳥条約法、または湿地に関するラムサール条約の目標をどのように脅かすか？ 私たちの政治的、経済的意思決定は、非人道的な生活に対してどのような影響を与えますか？ これらはカナダにおいてもオイルサンド業の展開、パイプライン、そしてブリティッシュ・コロンビア州からアジアへの沿岸の海運ルートを議論する際の重要な質問です。



頭部がべっとりと油で汚れていたオオミズナギドリ
(2017年8月26日に標識した足環09B-38379を装着していた)

撮影：スコット・サイモン

(ブログ原文は冠島調査研究会のウェブサイトリンクしてある)